Osaka University Knowledge Archive

Title	言語変種の形成過程に関する社会言語学的研究 : ニュータウンを事例にして
Author(s)	朝日, 祥之
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44758
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【31】

氏　　名	朝　日　祥　之（あさ ひ よし ゆき）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１８３１６　号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**言語変種の形成過程に関する社会言語学的研究－ニュータウンを事例にして－**
論文審査委員	（主査） 教　授　真田　信治 （副査） 教　授　土岐　　哲　　助教授　渋谷　勝己

論文内容の要旨

本論は、都市計画によって開発されたニュータウンを例にして、移住者が持ち込んだ方言間の接触によって形成された言語変種の実態とその形成プロセスを、社会言語学的な見地から詳細に追究したものである。

本論は４部 13 章で構成されている。

第１部では分析の前提となる点が整理される。まず、ニュータウンというものの定義付けをした上で、本研究のフィールド西神ニュータウンの概要を述べ（第１章）、本研究と関連する研究を概観、本研究の位置付けをしている（第２章）。本研究が移住者社会において生じる方言接触とそれに伴う現象を扱うことから方言移植研究の一例であることを示し、ニュータウンの定義をもとに、先行研究を(a)移住と言語変容研究、(b)都市言語研究、(c)ニュータウン研究の３つに分類し概説した後、それぞれの研究が抱える問題点を整理している。この点を踏まえ、本研究では、（Ⅰ）言語意識のレベル、（Ⅱ）言語構造のレベルの２つの局面を全面的に取り上げ、言語変種の形成過程をより包括的に明らかにすることを目指すとする。具体的には、（Ⅰ）については認知方言学的方法を、（Ⅱ）については自然談話データを用いた都市方言学的手法をそれぞれ採用するとする。そして、ニュータウンという地域社会へのアプローチのあり方について詳細に検討を加えている（第３章）。

第２部では言語意識のレベルにおける言語変種の形成過程を取り上げている。まず、方言認知調査の概要を述べ、分析の枠組みを示し（第４章）、西神ニュータウン居住者の言語変異に対する意識の全体像を示している（第５章）。そして、居住者の年齢、出身地などの違いによって生じる差異について分析している（第６章）。さらには、言語変種意識の形成のプロセスを、世代ごとに段階を追って記述している（第７章）。

第３部では言語構造のレベルにおける言語変種の形成過程を取り上げている。まず、分析対象となる談話データについて説明する中で西神ニュータウンに隣接して従来から存在する地域社会である櫨谷町の居住者の談話をベースラインデータとしたことが述べられる（第８章）。そして、引用動詞「言う」が用いられる場合の引用形式が脱落する現象（第９章）と動詞の否定辞の使用のあり方（第 10 章）についての分析が試みられ、五段動詞に後接する否定辞の分析の結果では、櫨谷町で関西方言の伝統的方言体系が老年層で保持されるものの、中年層、若年層では標準語の影響を受けたネオ方言形が多用されていることが示される。一方、西神ニュータウンの移住者の間で、非過去形には「－ナイ」、過去形には「－ナカッタ」が多用されるという傾向が確認される。否定辞の「－ヘン」「－ン」は関

西方言の特徴であると認識されやすいものであるが、ニュータウンでは全国共通語形が用いられているのである。しかし、若年層では、基本的に関西方言の否定辞である「ーヘン」と「ーン」が多用されるようになることが明らかにされる。ただし、中年層で多用される「ーナイ」「ーナカッタ」が若年層間でも確認され、関西方言の否定辞が多用されるとはいうものの全国共通語形も用いられている状況が示される（第 11 章）。これら構造レベルにおける言語変種の形成プロセスが、世代ごとに段階を追って詳細に記述されているのである。

第４部では上の第２・３部において明らかとなった点をもとに、言語意識、言語構造のレベルにおける言語変種の形成過程を統合しつつ、全体がまとめられている（第 12 章）。そして、今後の課題について述べられている（第 13 章）。

論文審査の結果の要旨

本研究は、移住者社会において生じる方言接触とそれに伴う現象を扱うものであるという点において、前衛的な社会言語学的研究と位置付けすることができよう。特にニュータウンを対象に、自然談話データを用いた都市方言学的手法の採用は高く評価されるところである。収録した談話データの量は 100 時間に及ぶという。世代ごとの膨大なデータが蓄積されたわけである。

言語変種の形成過程を、言語意識レベルと言語構造レベルの両面から取り上げ、より包括的にかつ具体的に解明した点は貴重である。対象とした西神ニュータウンでは新たな言語変種が成立していく過程にあることを明らかにした。

西神ニュータウンの中年層においては、言語意識レベルで形成される「ニュータウン言葉」が、言語構造レベルでは全国共通語形が多用される状況を意識したものであること、言語意識レベルにおいて周辺部の言葉として認知される「田舎っぽい言葉」は言語構造レベルでは関西方言形が主流を占めている状況を指してのものであることが分かった。一方、若年層においては言語意識レベルで言語形成期に西神ニュータウンを含めた周辺域の言葉と判断した「神戸弁」が言語構造レベルでは関西方言形が多用される状況を指してのものであることが分かった。なお、言語形成期以後、言語意識レベルにおいてニュータウンの言葉を「ミックスした言葉」と認識するようになるが、それは言語構造レベルでは全国共通語形が用いられる状況を指してのものであることが分かった。いずれもデータ分析から帰納された貴重な結果である。

ただし、本論文にも問題がないわけではない。それは、本論文では言語意識と言語構造の側面だけに焦点が当てられ、ニュータウンにおける言語行動、特に住民同士のコミュニケーションの具体的状況がほとんど記述されていない点である。その点の課題は残っている。しかしながら、それは今後の発展的課題として捉えるべき性質のものであり、本論文の本質的価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。